

今の子供たちはなかなか「ことわざ」に接することも少なくなりました。「ことわざ」は先人の教えです。剣道の稽古にも「いにしえに学ぶ」という意味があります。「年寄りの冷や水」にならぬよう、少しでも皆さんの参考になればと思い「つれづれなるままに」書いています。ぜひご笑読下さい。

「一念岩をも通す」ということわざがあります。

「心を込めてすればで出来ないことは何もない。」という意味です。

さて、皆さんは目標を持っていますか？親子でその目標を共有していますか？もちろん剣道の話だけではありません。しかしここでは太秦には最近入部した園児から、もう10年になる中学生まで在籍されています。おのずとその達成度は違います。私が太秦にOBとして故川口先生のお手伝いに戻ってもう25年を過ぎました。

最初は人数の少なさや、レベルの低さにショックを受け、無我夢中でした。指導に携わって最初の府下大会で優勝し、表彰されるチームを見て「1度京都で1番になりたい。」それが最初の目標でした。

当時、小学1年生で入部した先輩たちが、小学生初の京都チャンプを目指すことになりました。彼らが4、5年生となった年、何年も行けなかった武道館予選を突破、久しぶりの出場を果たしました。翌年、いよいよ彼らが6年生となり、その春の「近畿新人大会」で準優勝、私は大きな勘違いをしました。「あれ？京都一になることは、全国でもやれる？」この時の勘違いが、目標を「日本一」へと変えていきました。もちろんこの年、夏の府下大会は小学生初優勝、ひとつの目標を達成しました。

これ以降、目標が「日本一」に変化したことは言うまでもありません。ただ、平坦な道のりではありませんでした。この6年にもならない時間でありましたので、当時は親御さんも私より年上、存続がやっとだった部を一気に上昇させたわけですから、内外ともに風当たりも強く、泣きたいこと、辞めたいことも何度もありました。後援会からは「無用の長物」（あっても何も役に立たないどころかむしろ邪魔になるものたとえ）として扱われたり、川口先生から1時間以上罵声をかけ続けられたこともありました。

幸いだったのはこの性格、午年の私は元来我慢強かったのかもしれない。「京都で一番」の夢を捨てることはありませんでした。

私は昔話「わらしべ長者」の話が好きです。人生の教訓にしています。あの「ころんでもただでは起きない。」精神は嫌なこと、辛いこと、悲しいことがあっても、「何かつかんで起きよう。」とする性格の悪さ？？はあったかもしれませんが。そうやって頑張っていると応援してくれる仲間や親御さんが出てきます。指導者や先輩、親御さんたちも少しづつ「下井さんを信じてみよう。」という人たちが増えてきました。（当時は先生として認められていたわけでもなく、先輩として子供たちも「下井先輩、下井さん。」でした。）

これはまだまだ「道半ば」の話です。しかしながら自分を育てていただいた「太秦」という道場の立て直し、「京都での優勝！」という「一念」を貫いたことは事実です。

時はたち、その「一念」も「人間力の強い子を育てる」「日本一」などに変わっていきました。最初の「一念」から大きく進んだようには思いますが、その分、いつのまにか「太秦少年剣道部」とその子供たちのために人生をかけて日々を送る自分があります。

「一念」は大切です。是非「一念発起」して下さい。そう、それを信じて汗を流して下さい。きっと応援してくれる仲間も出てきますよ。

合掌

京都太秦少年剣道部 道場長 下井浩介

